

研究ノート

地域の空間生産に関する研究 ―土浦市小野地区を事例として―

根橋 正一

はじめに

本研究は、現在茨城県土浦市の小野地区を対象として地域の変化を研究するものである。2008年まで小野地区が属していた新治村は、戦後の近代化の歩みの中で、自らの村内に農業ばかりでなく工業や商業を興し、発展させ工業エリア、工場従業員居住エリア、そして商業エリアや文教エリアをも整ったいわば「小而全（小にして全）」の将来像を提示し、その実現に努力してきた。しかし、その目標は必ずしも達成されることはなく、その不完全性を背景にして土浦市との合併が模索された。合併後は、土浦を中心として策定される都市発展計画の中に小野地区の位置づけがあった。新治村の時期、土浦市合併後いずれ時期においても描き出された小野地区のイメージを実現することは容易ではない。これはいかなる事情によるものか。この問いを掲げて本論はその原因の一端を明らかにしようとするものである。

結論を先取りする形になるが、それは小野地区が一貫して、周辺の、衛星的な位置にあり続けたからではないかという仮説を提起しておきたい。新治村の時期には、村の中心は藤沢地区であり、近代的な工業セクション、商業セクションはそこに集中する計画が立てられたのであり、土浦時期には旧土浦を中心とした計画の中で小野地区はさらに衛星的な位置づけを余儀なくされているのである。さらに、今年建設開始50周年になるという近接するつくば市の存在もまた小野地区の計画や発展に影響を持っていると考えられる。当初は土浦を足掛かりとして建設が始まった研究学園都市は、土浦から離れ独自に東京や成田、さらにそれらの都市を通して世界と連なる国際的なイノベーション都市へと変貌してきた。土浦市をもその衛星都市に組み込むような位置づけになりつつあると言えるのであり、小野地区の在り方にも大きくかかわっていると考えられる。この間の小野地区を考察の対象にするには、旧新治村における位置づけ、土浦市における位置づけ、さらにつくばとの関係から眺めていくことになる。

本研究の方法論としては、H.ルフェーブルの「空間の生産」論をベースとする。すなわち、物理的空間、空間の表象（思考された空間）、表象の空間（生きられる空間）という3視点から記述することになる。

1章では、現在の小野地区における空間生産の素材となる物理的、地理的、歴史的な空間状況について概観する。2章では、小野地区の小町の里にかかわる3つの開発計画とその成果、結果についてみていく。すなわち、新治村時期の村が策定した都市開発計画、合併後の土浦市の計画、それに研究学園都市筑波の建設計画である。そして3章は、生きられる空間、すなわち住民やユーザーの空間への働きかけに相当する部分であるが、それは研究学園都市に居住する人びとの提案するライフスタイルへの注目である。また、小野地区や土浦市というなつくば周辺地域にとっては外来のユーザーの視点であり、住人たちにとって自らの地域活動や経済活動を規定するものである。再度地域住民の視点からの研究が続かなければならないだろう。

1. 物理的空間

小野地区は、つくば山系の東麓の扇状地に位置し、古くから人の住む場所であった。明治時代まで小野村は、東城寺村、大志戸村、小高村と隣接しており、明治15年には連合村東城寺村となった。

このエリアは埋蔵文化財が数多く立地しており、古くから人の住む地であったことを知ることができる。この4地区から先土器遺物は確認されていないが、縄文時代以降の遺跡が確認されている。大志戸大地遺跡、小高天神遺跡は縄文時代のものであり、いくつかの古墳群もある。また須恵器の窯跡がこの4地区に集中している。

この4地区には古代の仏教寺院がある。すなわち、小野地区の清滝寺と東城寺である。清滝寺は大同2（807）年徳一によって創建されたと伝えられる¹⁾。東城寺は、筑波山

表1 新治村4地区の埋蔵文化財

地区名	埋 蔵 文 化 財
小高地区	小高須恵器窯跡、小高寄居古墳群、小高石橋遺跡、小高熊野塚遺跡、小高山ノ神遺跡、小高天神遺跡、小高村内須恵器窯元、小高天神向古墳
東城寺地区	東城寺寄居前須恵器窯跡、東城寺桑木須恵器窯跡、東城寺須恵器窯跡、東城寺舞臺カンギ遺跡、東城寺経塚群、東城寺寺院跡
小野地区	小野八百田・裕須恵器窯跡、小野須恵器窯跡、小野大道西遺跡、小野荒地前遺跡、小野古屋敷遺跡、小野唐崎遺跡
大志戸地区	大志戸後窪遺跡、大志戸西木戸遺跡、大志戸古墳群、大志戸大地遺跡

出典)「新治蔵埋蔵文化財一覧」『図説新治村史』新治村史編纂委員会、昭和61年、298ページより作成

1)『図説新治村史』新治村史編纂委員会、昭和61年、55ページ

麓に立地するいくつかの天台宗の古刹のひとつで、延暦15（796）年に最仙によって開かれた。東城寺背後の山中「堂平」の地がかつての東城寺の跡であり、奈良時代の瓦が採取されている。また、平成9年焼失した薬師如来および両脇侍像（日光菩薩・月光菩薩）は平安中期11世紀半ばのころの制作であった²⁾。東城寺を守る鎮守社として勧進されたのが日枝神社で、社伝によれば大同2年に比叡山山麓の日吉社を勧進したものである³⁾。

近世の新治は、土屋藩の領地で新治台地に畑作地帯を、桜川と天の川流域に水田地帯をもち、農業生産を中心とする純農村であった。畑地はおもに自給作物が栽培され、冬作は農民の主食である大麦が作られた。夏作は、稗・粟・豆・胡麻等の雑穀、イモ類が中心であったが、次第に加工原料となる商品作物が栽培されるようになった。17世紀末土浦で大黒屋が醤油醸造を始めると、周辺の大豆生産は自給作物から商品作物となった。また、元禄期から発展した木綿業は桜川流域にも綿花栽培をもたらしした。収穫された棉は繰棉（種子を除いた繊維部分）にして、あるいは木綿繊維に加工して仲買人に売り渡された。換金作物である大豆や綿の栽培は、一方で金肥である干鰯・メ糟の使用に向かわせ、農村は否応なく貨幣経済に巻き込まれていった⁴⁾。天明元（1781）年、東城寺村の駒ガ滝にほど近い紋衛門屋敷に、大規模な水車場が作られた。この水車は、棉実を絞って灯油にするための絞油水車であった。経営者は江戸の棉実問屋で水車株を持つ相模の者であった。駒ガ滝を水車場に選んだのは北条町の棉実仲買商人であり、当地が原料の棉実を確保しやすく、豊富な水量を有する駒ガ滝が棉実絞油に適した条件があったからであった。東城寺の水車は、相模の水車に続くもので関東では綿実油絞りの先駆的な役割を果たした⁵⁾。

明治22年市町村制のもとで小野村は、小高村・大志戸村・東城寺村・永井村・本郷村とともに山の庄村となり、さらに昭和30（1955）年には斗利出村・藤沢村と合併して新治村が発足した。新治村は、平成17（2005）年に誕生50周年記念式典を行った後、土浦市と合併して50年の歴史の幕を閉じた。その間小野地区は、稲作と果樹栽培の畑作を中心とする農業地域としてばかりでなく、村民の交流や村外からの観光者との交流拠点としての姿を整えていった。林業もまた、大切な産業であった。

戦後、山の庄地区の採石業は、道路用骨材を得るために県営の採石場ができたのが始まりで、県道に沿った小高地区に採石業が起こった。ここの採石は良質の硬砂岩で、一

2) 同上書、56－57ページ、『新治村50年のあゆみ』11ページ

3) 『土浦市史民俗調査報告書第1集 山ノ荘の民俗・日枝神社の流鏑馬祭』土浦市博物館、2014年、108ページ

4) 『図説新治村史』150－154ページ

5) 同上書、160－161ページ

般道路や建築用骨材として、特に鹿島港建設、成田国際空港、筑波学園都市、常磐自動車道などに膨大な量が搬出された。この地域は、天の川の源流として東城寺には駒ガ滝、一の滝など散策の名所として知られた景勝の滝があり、かつては水車も動いていたが、碎石の進捗で何れも枯れ死してしまった⁶⁾。

県南地域の開発が進む中で、本村の都市計画についても、美しい自然環境を生かした、都市計画公園等の整備が検討されている⁷⁾。

本村の観光資源を見ると、名所旧跡が数多く、指定文化財も国5、県25、村46を数える。このうち、古代人の髪形といわれる「美豆良（みずら）」の出土によって全国的に有名になった武者塚古墳のほか、歴史の香りの残る神社、仏閣などを訪れる人も多い。昭和40（1965）年東城寺地区に自然休暇村と銘打った施設「ゆう・もあ村」ができ、多くの客を集め、観光客輸送のために数台のバスが運行された。昭和49（1974）年、表筑波スカイラインが開通し、筑波山への距離を縮めると同時に、尾根づたいに景観を愛でながらドライブを楽しめるようになった。昭和51（1976）年、新治村は朝日峠に展望公園を作って、この稜線を行く行楽者の憩いの場とした。昭和57（1982）年にこの展望公園とゆう・もあ村は、ともに茨城観光百選に入った⁸⁾。

『図説新治村史』の中で当時の村長野口福太郎は、村の将来展望について述べている。

学園都市と土浦、出島、千代田、八郷、筑波を結ぶ広域行政圏の中で、本県南西地域が今後、首都圏の人口大移動を想定したとき新しい経済圏の発生と、それを受けて取り組むべき町村の立場を考慮しなければならない。即ち自然と歴史と、新しい文化を組み入れた都市的環境、高度化した生産と生活の場を十分に生かした郷の建設こそが理想であり、そこに新しい空間があり、情緒があり、レジャーがなければならない。

幸いにして本村には、清らかな空気、水、緑が豊かで、首都圏のサークルの中で、経済力を高め、安定した生産設計を求められる素地がすでに十分であり、21世紀の人間が強く求める数々の条件を兼ね備えていると自負しているから、新治村の現況を根底から改革し、変革をもたらすような開発と転換をなす必要はないかとも考えられる。しかし、周辺はどしどし変貌を遂げてゆく中で、独り新治村だけが手を拱いていられるはずはなく、将来へ向けての展望と設計を、この素地の上に立って計画しなければならない。

第一に観光型の農村としての新治村はどうか。豊かな水や緑をもった国定公園内

6) 同上書、264－265ページ

7) 同上書、271ページ

8) 同上書、276－277ページ

に位置する本村の自然は、絶好の観光条件であるばかりでなく、数多い遺跡や文化財に恵まれているから、観光ルートの整備と、文化遺産の掘り起こしと保護に意を注ぐこと、そのために村観光協会が発足して、これらの運営とPRに努めることになって、その活動が大きく期待されている。なお、本村は温暖な地域であり、霞ヶ浦用水の利用もあることゆえ、果樹、園芸にも適し、観光農園としての設計と設備を整えれば、近郊型農村としても十分に他と太刀打ちできるものと考えられる。⁹⁾

表2 新治村50年のあゆみ

西暦	和暦	新治村の出来事
1955	昭和30	藤沢・斗利出・山の荘3村が合併して新治村誕生
1965	昭和40	自然休暇「ゆう・もあ村」開村
1974	49	表筑波スカイライン（パールライン）開通
1976	昭和51	朝日峠展望公園着工
1977	52	清滝寺再建
1979	54	村文化協会発足
1980	55	日枝神社流鏝馬祭18年ぶり復活
1981	56	森林公園完工
1982	57	常磐自動車道、土浦北インターチェンジ開設
1983	58	朝日峠展望公園・ゆう・もあ村、茨城観光百選に選定 武者塚古墳発掘、古代人髪型「みづら」出土
1985	昭和60	科学万博茨城パビリオンにて新治の日開催 村観光協会発足
1986	61	『新治村史』刊行
1987	62	田宮古墳群発掘調査開始
1988	63	ふるさと森オープン
1989	平成元	山の荘・東城寺周辺の森、成沢・竜ヶ峰のヤマザクラ茨城の自然100選 ふるさと創生事業開始
1990	2	村大学誘致促進協議会発足
1991	3	新治ショッピングセンター「サンアピオ」オープン
1993	5	土浦市・出島村・新治村の6農協合併、「土浦農協」誕生
1994	6	小野小町の里整備で水車小屋完成
1997	平成9	小町の館竣工 東筑波新治工業団地分譲開始 東城寺本堂消失
1998	10	小町の里にはとバスツアー来る 小町万灯61年ぶり復活
2000	12	第1回小野小町文芸賞創設
2002	14	つくばりんりんロード全線開通
2004	16	東城寺本堂再建
2005	17	新治村誕生50周年式典 土浦市と合併

出典)『新治村誕生50周年記念誌 新治村50年のあゆみ』茨城県新治村、平成18(2005)年より作成

9) 同上書、277-278ページ

『図説新治村史』が編纂された1986年当時ゆう・もあ村は、新治村の観光発展のシンボルであり、都心からの観光客を招き入れることのできる施設であった。戦後、1950年に西武園遊園地がオープンして以来遊園地の開業は続いたが、高度経済成長期とその後の時期には各地に遊園地が開設された¹⁰⁾。しかし、1983年開催のつくば科学万博と同時期に発足した「ディズニーランド」に代表されるテーマパーク型の遊園地の登場によってそれ以前の遊園地は集客力を失い、閉園された施設は多い。ゆう・もあ村もまたその一つであった。その後の新治村都市計画においては、観光施設開発として小野地区の小野小町伝説の活用が検討されることになった。

新治村は50年の歴史を閉じて2005年土浦市と合併し、小野地区もまた新たな構想の下で地域づくりへと進んでいった。

2. 思考された空間

現在の小野地区の形成にはどのような計画が提案されて来たのかについてみていく。新治村の時期の最終段階で提案された「総合計画」と「都市計画マスタープラン」に現れた地域のイメージについて述べ、土浦との合併に際して記述された小野地区について、さらに土浦市の都市計画について整理していく。

(1)新治村における小野地区

ここでは『第4次新治村総合計画（平成13～17年）』、と平成15年3月に提案された『新治村都市計画マスタープラン』に注目して、村の計画立案者たちの村に関するイメージおよび小野地区に関するイメージとについて概観する。

新治村都市計画マスタープラン

平成15（2003）年3月に発表されたこのマスタープランは、「おおむね20年後を目標とした新治村の都市計画に関する基本的な方針です」と述べており、2年後の合併とは無関係に20年後の村域のイメージ明らかにしようとしている。

都市づくりの目標として、「筑波山麓の豊かな自然環境や田園の緑の中で培われてきた新治村の伝統・文化を大切にしながら、人と人、人と自然、人と街など様々なふれあい・交流や新たな新治文化を育む故郷づくりを目指します」と掲げ、将来都市像としては「山の恵、里の恵、歴史の恵を慈しみ豊かな暮らしを育む。緑・いきいき・ふれあい文化の郷：にいはり」と提案している。これに込められた思想は、「筑波山麓の自然や

10) 中島恵「我が国の遊園地・テーマパーク産業の生成と発展」『大阪観光大学観光学研究所報 観光&ツーリズム』第16号、54ページ

豊かな農産物を生み出す田園環境、守り継がれてきた伝統・文化は村の恵であり、住民の誇りである。市街地やインターチェンジ周辺の産業地域における都市活動は村の活力を支える新たな恵みである。これらは新治の個性と魅力の源である。地域の風土や環境を大切に、住み続けていくことのできる心豊かな暮らしの実現を目指す。暮らしと自然、新たな産業・文化のかかわりを大切に、誰もが生き生きと暮らせる故郷づくりを目指す」と解説している。

この上に提案される都市づくりの方向性は次の3点である。

- ①山・里・歴史の恵を生かしたまちづくり（山・里・歴史の共生空間づくり）
- ②安心して住み続けることのできる快適環境づくり（安心・安全な故郷づくり）
- ③ふれあいを育む活力ある基礎づくり（いきいき・ふれあいのまちづくり）

こうした理念のうえに、全体構想が語られる。新治村全体として個性豊かで魅力ある環境や空間づくりの基礎となる土地利用が図られる。第1は居住系土地利用であり、第2は産業系土地利用、第3は行政文化施設地、第4は緑地である。居住系土地、すなわちいきいき市街地ゾーン（市街化区域）では、ゆとりある住宅市街地を形成する。産業系土地としては、国道125号線沿線では便利で活力ある中心市街地づくりを進め、東筑波新治工業団地では企業の立地誘導を図る。将来産業系市街地ゾーンでは工業・流通施設や広域的商業施設の立地誘導を図り、良好な平地林の維持、緑豊かな環境形成を図る。行政文化施設地では、各施設の維持・充実やゾーンを象徴する景観の形成、安全な歩行空間の形成を図る。緑地は、森林や自然環境・象徴的な環境維持・保全に努め、歴史的資源や観光資源の活用を図る。桜川や天の川などの河川緑地や寺社・遺跡等の樹林地、平地林等の保全を図る。

これらを実現するために、3つの軸と拠点の形成を提案している。3つの軸とは、山・里の豊かな生活環境を支えていく骨格であり、山・里連携軸（骨格道路）、水と緑のうるおい軸（河川）、健康・ふれあい軸（つくばりんりんロード）である。地域の魅力・活力づくりの場、ふれあいの場となる3つの拠点は、地域の活力づくり拠点、伝統文化拠点、ふるさと新治づくり拠点である。

こうした構想の中で、小野地区が含まれる山の荘地区は、「山麓の緑と歴史にいだかれて、豊かなふれあいと暮らしを楽しむところやすらぐ新治のふるさと：山の荘」というキャッチフレーズの下、骨格的道路網で市街地と結び、つくば千代田線といった主要幹線道路も整備し、地区の活力づくり拠点、伝統文化拠点およびふる里新治づくり拠点形成を推進する。具体的には、地区の活力づくり拠点には小野地区と山の荘地区周辺、伝統文化拠点には日枝神社周辺、ふる里新治づくり拠点には小町の里周辺、が想定されている。また朝日峠展望公園はやすらぎの里であり、東城寺、小野両地区周辺が伝統・文化・ふるさとづくりの役割を担っている。

新治村第4次総合計画

第4次総合計画は平成17年を目標年度として13年度から始まる5か年計画で、村としては最後のものである。

基本目標には3点がうたわれている。すなわち、①活力宣言：若者が夢を持って行動できる活力ある村をつくる、②定住志向：豊かな自然の中でやすらぎ、安心して住める村をつくる、③個性重視：歴史を伝統を大切に、新しい文化・人づくりに取り組む村をつくる、である。村の将来像には「やすらぎと活力のある田園都市」を掲げ、基本理念は「〈にいはりごころ〉—緑の大地が私たちのステージ」としている。総合計画では、環境づくり、文化・人づくり、産業づくり、交通ネットワークづくりの4つの提案を行っており、産業づくりにの第4番は、「自然と歴史・文化を生かした観光の振興」、「北部山麓地域の水郷筑波国定公園を中心に、表筑波スカイライン（パールライン）、朝日峠展望公園、小野小町の里など筑波山系を中心とした豊かな自然と歴史・文化を生かした観光施策を推進」するとしている。

産業の振興に言及した箇所にも小野地区の「観光の振興」にふれている。「小野小町の里を中心とした北部山麓一帯の活用を図るための関連整備を進めるとともに、イベント面での充実を図る」ことが述べられている。つづいて、「都市と農村の交流を進めるための市民農園、体験農業等の新たな余暇活動の展開を検討します」とあり小野地区を村内外の都市住民との観光、交流のエリアとして観光産業振興の中心と位置付けている。

第4次総合計画においても新治村都市計画マスタープランにおいても小野地区は観光産業の中心であり、村の誇りである歴史・伝統・文化が保たれるべき場所として認識され、村内外の都市住民とのふれあい、交流の空間として発展させる方針が示されていた。新治村は自らを農業地域、工業地域、工場労働者居住地域、商業地域等が完備した総合的な都市へと発展するというイメージを持ってゾーニング構想を提案している。その中で小野地区に割り当てられた役割は村内外からレジャーや観光を目的とした人々を引き寄せることであった。長い歴史や文化、伝統の力、農業を資源にして観光化を図る資源を持っていると判断されたのである。

(2)土浦との合併における小野地区

平成17（2005）年度新治村は土浦市との合併に踏み切った。それに先立ってまとめられた『新市建設計画¹¹⁾』は、合併のねらいを次のような3点に整理している。すなわち、地域全体の持続可能的発展の確保、県南地域をリードする中核都市形成、環境都市としてのイメージアップである。このうち、中核都市に関しては、「新市の周辺地域には、

11)『新市建設計画（序章計画の前提）』土浦市・新治村合併協議会事務局 平成16年9月、49ページ

つくばイクスプレスの整備や百里飛行場の民間共用化、首都圏中央連絡自動車道の整備など、広域交通インフラが整います。新市を含めた県南地域はこれらを活用し、地域間交流の促進と国際化を進めるとともに、自律的な成長・発展を目指していく必要があります。将来的には、つくば市と牛久市を含めた人口50万人規模の自立都市が展望されていますが、新市はその中において中核的な役割を果たしていけるよう、広域的な拠点性の強化や国際化を図りつつ、地域における存在感の向上を図ります」と述べ、環境都市については、「筑波山麓や霞ヶ浦など豊かな自然環境と充実した都市機能が融合することで都市農村交流をはじめとする農業と観光の連携や各種環境施策の展開が可能となり、環境都市としてのイメージアップを図れるとともに心豊かな市民生活の向上を目指すことができます」とのべ、持続可能性、中核都市、環境都市という現代的、国際的な課題に応えることのできる最先端都市の構想を描いている。

(3)土浦の都市計画における小野地区

土浦と合併してからの新治エリア、小野地区はどのような位置づけで計画されたのかについて、土浦市の総合計画および観光基本計画に着目する。

第7次土浦総合計画¹²⁾

新治村が土浦と合併した3年後の平成20年3月にまとめられた第7次土浦総合計画における小野地区の位置づけについてみていくことにする。

この計画は平成20年度から29年度までの10年間の基本構想、および24年度までの前期基本計画、25年度以降の後期基本計画とからなり、短期的には3か年実施計画が毎年度見直されることになっている。

第2章まちの将来像の第1節では将来像を「水・緑・人がきらめく 安心のまち 活力のまち 土浦」というキャッチフレーズを掲げ、第3節の土地利用構想4つの土地利用ゾーニングの方針を提示している。すなわち①水辺ふれあいゾーン、②緑のふれあいゾーン、③農業・田園ゾーン、④市街地ゾーンである。②緑のふれあいゾーンについては、「水郷筑波国定公園を構成する筑波山麓の緑は、環境・景観的にも貴重な財産であり、森林環境を保全します。筑波山麓およびその周辺は、市民や首都圏住民が身近に緑とふれあえる場として、また観光・レクリエーション空間として積極的な活用を図ります¹³⁾」と述べており、かつての新治村の筑波山麓エリアの意味を明確にしている。次に、6つの拠点を提案しているが、その第1は水・緑・憩・交流の拠点で、「・・・小町の里、朝日峠展望公園を拠点として位置づけ、市民の広域的なレクリエーションの場として、ま

12) 『第7次土浦市総合計画』土浦市、平成20年3月

13) 同上計画、32ページ

た市街の人々との交流の場としての機能充実・整備を図ります」, 第2の農業拠点では、「・・・観光果樹の小野・大志戸地区を農業拠点と位置づけ, 生産基盤の整備や体験・交流型農業を促進します¹⁴⁾」と述べられている。小野および周辺地域は「水・緑・憩・交流の拠点」「農業拠点」であり, 緑のふれあいゾーンとして位置付けられている。農業と観光の地域ということができる。

次に土浦市の観光計画における小野地域周辺の動向について注目しよう。

土浦市観光基本計画(案)¹⁵⁾

これは, 第7次土浦市総合計画の観光分野の個別計画として位置付けられるもので, 平成21年に検討が進んだ。これでは, 計画策定の視点として5点を確認している。①霞ヶ浦を生かした観光, ②つくば山麓を生かした観光, ③土浦城址と城下町の街並みを生かした観光, ④市の花「サクラ」を生かした観光, ⑤土浦全国花火競技大会を生かした観光の5点である。また土浦市の観光の強みとしては, ①東京圏からの近接性と広域交通体系の整備, ②つくば市との近接性, ③霞ヶ浦から筑波山麓へ連なる雄大な自然資源, ④歴史的・文化的資源の蓄積, ⑤各種工場の集積, ⑥豊富な人的資源, などが数え上げられている。主要事業として挙げているのは, 自然資源の魅力化, 歴史資源の魅力化, 文化資源の活用, 人的資源の活用と育成, 訪れやすいまちづくりの推進, 広域連携の推進, 情報発信の推進である。この自然資源の魅力化の具体化として新治の里山空間の活用という項目がある。都市と農村の交流事業, 里山ミュージアム構想が述べられているのである。

土浦市小野地区の小町の里の諸計画における位置づけを整理すると次のような表になる。

表3によれば新治村の時期に確定された小野地区の位置づけは, 合併の構想段階でも, 土浦合併後も基本的に踏襲され, 農業と観光を担当する方針であった。しかし, 小町の里に関するいくつかの施設は完成をみているが, この地に根差した独自の観光地のイメージは定着しているとは言えない。伝統や歴史を大切にする方針に呼応して, 近隣の流鏝馬や小町万灯が復活したり, 焼失した寺院が再建されたりしてきたが, 他方でもう2度と再生できない自然, 歴史遺産破壊も行われてきたのである。天の川の源流で江戸時代に初めて綿実油絞りの水車が作られた川筋も駒の滝も今ではもう再生することはできない。建設用骨材を供給するための採石業が発展することで, それらの自然も文化の名残も破壊されたからである。自然や文化が残る美しい山麓, 里山景観もまた, 採石場の無残な岩肌を丸出しにした山容にかき消されているのである。ここで採取された碎石は鹿島臨海港・成田空港・筑波研究学園都市の建設のための良質な骨材になったのだと

14) 同上計画, 33ページ

15) 『土浦市観光基本計画(案)』土浦市, 平成21年3月

表3 諸計画における小町の里の位置づけ

計画年月	計画名	小町の里の位置づけ
H17年 3 月	新市建設計画	<p><土地利用と拠点> 緑のふれあいゾーン 水・緑・憩いの拠点 農業拠点</p> <p><主要施策・主要事業での位置づけ> 小野小町の里，歴史や文化を伝える施設の整備 果樹などの特産物，ブランド化 小野小町の里整備事業</p>
H20年 3 月	第7次土浦市 総合計画	<p><土地利用と拠点> 緑のふれあいゾーン 水・緑・憩い・交流の拠点</p> <p><産業振興> 果樹，そばなど特産物の生産振興，団塊世代の受け皿としての観光と連携したグリーンツーリズム指向の取入れ，都市農村の交流促進。</p>
H21年 3 月	土浦観光基本計画	<p>新治・上高津の里山空間の活用（「里の巡り路」づくり） 物語性のある歴史散策ルートの設定（小町ゆかりの地巡り路） 伝統的な食文化の発信と新たな食の開発 土浦の花火とイベント・文化行事の充実 交通体系の整備</p>
H21年 3 月	土浦市都市と農村の 交流事業調査報告書	<p><基本的な方針> おもてなしの心と地域リーダー的人材の発掘 土浦型都市農村交流の推進 地域資源を生かした都市農村交流事業</p> <p><主要事業> 広域連携の推進，既存の活動の充実，土浦型都市と農村交流事業の構築，体験交流施設の機能充実。</p>
H20年 5 月	第4次土浦石岡地方 広域市町村圏計画	<p><主な施策> 観光資源の活用と開発 観光ルートの整備と情報の発信 観光施設の整備充実と受け入れ態勢の確立 観光農業の推進</p>
H19年度	東筑波ヴィレッジ パーク構想	<p><小町ふれあい広場> 導入部：小町をテーマとしたブランドデザインの確立，ホームページの開設，地域総合インフォメーションの充実 中心的要素：小町庵の新メニュー，米づくり体験，小町グッズの開発 付加価値的要素：干し柿活用の農業体験施設，ジャム作り</p>
H 5 年12月	小野小町の里整備 基本計画	<p><小町の里づくり> 基本コンセプト：ふるさとの歴史文化がいきづきたおやかな里づくりを目指す ターゲット：広域圏からの観光立ち寄り利用，滞在観光・体験利用，宿泊滞在利用の受け入れ 効果：むらおこしの種とし，村全体の活性化に資する</p>

いう。この無残な山容こそ、歴史や文化を破壊して建設された近代を構成しているのだ。筑波山の一角が文字通り身を削って、現代のつくばを建設したこの歴史こそ、東城寺や小野地区が人々に伝えなければならないもう一つの歴史ではないのか。

こうした土浦のいくつかの計画を見ると、土浦自身の位置づけが状況を反映していない。県南の雄都であり、牛久市、つくば市、かすみがうら市などの中心的な役割を果たすことを望んでいるが、いったいどのような側面において県南の雄都としてリーダーシップをにぎる可能性があるかは具体的な記述はない。過去の歴史の中でこのエリアにおいて土浦が果たしてきた役割は決して小さなものではなかったが、現状ではそのようなイメージばかりを先行させても説得力はない。筑波学園都市の建設には、土浦も新治も大きく貢献した。土浦は学園都市建設の足掛かりであったし、土浦なくしてその建設はなかったであろうが、つくば市が大都市化し、独自のルートで都心や成田とつながることになって土浦の位置づけはますます小さなものになっている。土浦や周辺の市町は様々な側面で作つくばからの影響を受けている。小野地区のこれまでの在り方も計画も、今後の在り方もつくばからの影響によって決せられる側面はますます増えていくと考えられる。次に、筑波研究学園都市の動向について整理する。

筑波研究学園都市

筑波研究学園都市の計画は、日本が高度経済成長を達成し、フォーディズム型の工業国として成功した1960年代に構想されたものであり、大都市東京首都圏への過剰人口集中に歯止めをかけ、過密を緩和すること、および科学技術の振興と高等教育の充実という2つの大きな課題の解決を目標に掲げてスタートしたものであった。広大な森林地帯に全く新しい研究、教育都市を建設し、将来の日本社会イメージの実現のために建設された。筑波研究学園都市は東京の中心から北東約60km、成田国際空港の北西40kmの位置にあり、その建設の目的を実現してきた。現在の地域の課題は地域イノベーション力に集約されるが、つくばは国内において最も大きなイノベーション力を持った都市といえることができる。

土浦や小野地区の側から筑波研究学園都市をみれば、近接してイノベーション力の高い都市であるつくば市が発展してきたということになるだろう。科学技術イノベーション力ばかりでなく、産業のイノベーションセクションやイノベーション産業が立地し、さらに新たなライフスタイルもしくは消費スタイルを提案しつつつくば市は市内ばかりでなく近接地域に対しても影響力をもってきたのである。ここではつくば市の発展の概要と、その都市構造、さらに「つくばスタイル」として提案されているライフスタイル、消費スタイルについてみていくことにする。

筑波研究学園都市の建設は、本年が50周年になる。それは昭和38（1963）年閣議了解により建設が決定され、昭和55（1970）年までには、予定されていた国の試験研究機関、

表4 つくば市内の工業団地

工業団地名	所在地	企業数	企業名
上大島工業団地	上大島	27	LIXIL, ダイナパック 他
つくば北部工業団地	北原	23	小野製薬, 住化分析センター 他
つくばテクノパーク大穂	大久保	11	ヤンマー, エア・ウォーター 他
つくばテクノパーク豊里	緑ヶ原	23	岡村製作所, 大日本印刷 他
東光台研究団地	東光台	29	エーザイ, インテル 他
筑波西部工業団地	幸が丘	14	アステラス, 日本電気 他
つくばリサーチパーク羽成	観者台	8	久光, 植物ゲノムセンター 他
つくばみどりの工業団地	片田	8	伊藤製鉄所, 東亜工業 他
つくばテクノパーク桜	桜	8	東京電機, 日本新薬 他

出典) つくば市, 工業団地をお探しの方へ, <http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/14216/14365/000296.html>. (2014.7.1)

大学等の施設が移転・新設されとともに基幹的な都市施設もほぼ完成した。その後、都心部の施設設備が進むとともに、周辺部の工業団地等への民間企業の進出も活発化した。現在筑波研究学園都市は、人口約20万人、国、民間合わせて約300に及ぶ研究機関・企業、約1万2千人の研究者を擁するわが国最大の研究開発拠点となっている¹⁶⁾。さらに平成22年国勢調査によれば、人口は21万5千人で、研究学園都市地区人口7万9千人、周辺開発区人口13万5千人である¹⁷⁾。現在つくば市内に立地する国等の研究・教育機関32を数え、加えて9つのハイテク工業団地には高科学技術を持つIT産業や製薬、機械関連企業など先端技術を有する企業150社余りが操業している。

小野地区ばかりでなく土浦市にとって筑波研究学園都市のインパクトは大きなものがあるのではないかと。つくばの動向によって地域ばかりでなくその居住者たちの生活や経済活動もまた影響される。特に観光やレクリエーションを地域の課題とする小野地区のような地域にとっては、つくば市の住人たちの嗜好や行動様式が重要な要素となってくる。

3. 生きられる空間

つくば市は、現在人口22万人のうち2万人が各種研究所で研究に従事する研究者であり、その家族を中心とする、様々なセクションの住人が居住することになり、新たなライフスタイルが発生してきた。研究学園都市の居住者やユーザーのライフスタイルに注目する。

16) 国土交通省都市・地域整備局大都市圏整備課編『筑波研究学園都市』平成20(2008)年

17) つくば市／筑波研究学園都市とは, <http://city.tsukuba.ibaraki.jp/14278/14279/758/2338/0022337.html>, 2014年6月22日

つくばスタイルとロハス (LOHAS)

つくば市民が提案している「つくばスタイル」と呼ばれる新たなライフスタイルもしくは消費スタイルについて整理しておこう。つくばスタイルは、1990年代後半アメリカに生まれたLOHAS (Lifestyle of Health and Sustainability) と基本的なコンセプトは類似したもので、日本では2004年からマスメディアに登場した。ロハスは、健康・環境・社会正義・個人の発展・持続可能性に焦点をあてた商品やサービスの市場であり、消費者側のライフスタイル、消費スタイルが対応している。アメリカのロハスは、オーガニック農業の発展振興に顕著な役割を果たしているが、日本では農業よりもファッションや自然化粧品、はやりものの的に扱われることが多かった。大量の化石燃料の消費による大量生産大量消費で先進工業国は便利・豊かさを手に入れる一方、深刻な環境汚染、地球温暖化によって環境問題に直面し、国際的な取り組みが求められ、ロハスというような消費スタイルが提案された。「昔の暮らし」「貧乏な感じ」「攻撃的な環境運動」を嫌い、おしゃれな自分らしさ、生き方を求める人々がロハス的な生き方に行きあったのである¹⁸⁾。

つくばスタイルと呼ばれるライフスタイルは、雑誌『つくばスタイル』によって具体的に整理され、人々の関心を集めている。ここでは、この雑誌に現れた独自の消費スタイルについて概観する。

ロハス市場は次のような6セクションから構成されている。すなわち、①個人の健康、②クリーンビルディング (住宅)、③エコツーリズム、④自然のライフスタイル、⑤代替交通システム (ハイブリッドカー・バイオディーゼルオイル・カーシェアリング他)、⑥代替エネルギーである¹⁹⁾。一方、雑誌『つくばスタイル』に現れた項目をみると、健康的で自然な食材や加工食品に関する記事が多く、里山的、自然な居住環境、子育て環境などに関する記事も多い。この雑誌は、2004年11月発刊で毎年春・秋2回発行して、2014年春で18号になっている。つくばスタイルが最も強く多くのスペースを使っているのが、食に関する項目である。すなわち、食材としての農作物、加工食品、そしてレストランや食事処に関する記事である。

(1)直売所型農業

つくば周辺は、農業地域であり新鮮で安全、多種多様な野菜や果物が生産され、つくば市民に提供されている。つくばスタイルには農産物直売所は欠かせない。13号の「つくばの野菜は元気で美味しい！」と題した特集は、直売所を紹介している。

18) ロハスってな～に、<http://www.lohas.club.org/100.html> (2014年7月9日)

19) LOHAS, about <http://www.lohas.com/about> (2014年7月9日)

食の安全が叫ばれるいま、人々は本当に安全で新鮮な野菜を食べたい。
 食材に恵まれたつくばだからこそ、魅力的な価格で鮮度抜群の野菜を提供できる。
 編集が厳選した、つくばのおいしい野菜が集まる直売所を10軒ご紹介²⁰⁾。

ここで紹介されている10軒について概要を整理すると表のようになる。

表5 つくば市内農産物直売所の特徴

直売所名	所在地	特 徴
となりの野菜直売所	小野川	＜新鮮・安全・安心＞をモットーに、約60人の地元生産者が育てた農産物を提供。季節の野菜・果物・特別栽培米・国産はちみつなど。地元産コシヒカリ・卵・国産紅茶。珍しい野菜果物（タイナス・イタリアンパセリ・パッションフルーツ）。
つくばの野菜生産直売所	下原	ウド・季節の野菜・果物、惣菜、赤飯。平成2年開店、直売所の先駆者。約40人の生産者と茨城ならではの新鮮野菜を提供。店内の厨房で取り立て野菜を使った惣菜や漬物。
やさい村	上岩崎	11人の生産者の共同経営。直売所から徒歩圏内の畑で生産。夏はスイカ・メロンが人気。
農産物直売所僚友（なかま）	国松	筑波山参道入り口、「安全なものをリーズナブルに」がコンセプト。創業100年余の味噌蔵「湊屋」の味噌もある。
直販ゆうのう	遠東	主商品は、無農薬野菜・卵・合鴨米・手打ちそば・梅干。農薬・化学肥料を使わず栽培した野菜が主役。「野菜をつくって健康をつくろう」と呼びかけ市民農園「游農園」をスタート。都市と農村の交流の場として直売所と田舎料理「けんちん亭」を開業。
JAつくば市桜農産物直売所	古来	主な商品はねぎ・トマト・きゅうり・梨・イチジク・コメなど。安全安心をモットーに朝とれたての新鮮な野菜や果物が充実。注目は夏のスイカ・メロン。
たまごの森農産物直売所	上郷	平成6年卵から始まった野菜直売所で、一番人気は「酵素いちご」。
くつろぎの自然農八百屋近江屋商店	松代	体に優しい自然農野菜、生産者と消費者をつなげる八百屋。農薬や化学物を全く使わない旬の自然農や有機野菜を扱う。「旬の野菜セット」は配達可能。
農産物直売場 なの花	天寶喜	珍しい野菜・果物をそろえた直売所で、主な商品はトマト・イタリアン野菜・果物・コメなど。生産者別に交友でき、生産者指名で買う客も多い。
JAつくば市筑波農産物直売所	北条	看板商品の「つくば北条米」は皇室への献上米。野菜生産者の多くはエコファーマー認定を獲得しており、化学肥料や農薬をできるだけ使わない野菜がそろっている。筑波ふとっ子ねぎやトマトも有名。

出典)『つくばスタイル No.13』2011年9月、58～63ページ

20)『つくばスタイル No.13』2011年9月、58ページ

このほか合計22軒の農産物直売所が紹介されており、いずれも新鮮さやおいしさに加えて「無農薬・化学肥料」「有機農業」「健康」「安心・安全」といった食への配慮を強調しつつつくば市民へ食材を提供している。つくば市民の食に対する関心に対応して生産者も研究を重ね、新しい品種の栽培に取り組んだり有機農業に挑戦したりしている。新たな消費欲求に応える高い能力を持った農業者が出現している。

『つくばスタイル No.13』には「地産池消レストラン」の特集が続き、地元の食材を使った10軒のレストランが紹介されている。

例えば、レストラン「Le Seareerow」では、オーナーシェフ夫妻のそれぞれの実家から届く野菜、インゲン・モロッコインゲン・大葉・ピーマン・ししとう・きゅうり・モロヘイヤ・なす・プチトマト・おかひじき・みょうがなど、じゃがいもは筑波山麓の岡田さんから、肉類はつくば美豚、つくば地鶏、地酒もある。皿は笠間の陶芸家の作品。もう一つの例をみておく。洋菓子店「パティスリーマリア」では、つくば特産の大粒ブルーベリーのタルト、茨城産サツマイモ・紅あずまのペーストを使ったマドレーヌなどのスイーツを発売してきた。地元の小麦粉「ユメシホウ」、みたらい農園の卵を使用したチーズプリンや「ワタクモ」を開発した。「ワタクモ」は、みたらい農園の代表で画家の御手洗さんが筑波山麓で出会った伝説金色姫伝説の紙芝居に描いた雲の絵を使い、それを筑波大学の先生がロゴやパッケージにデザインし、筑波山から湧き出るようにふわふわとしたイメージと食感とから命名された。

こうして、地元の食材を使って、周囲の人びとの協力の物語を紡ぎだしつつ新たな食生活を提案していると言える。消費者もまた、その物語も一緒に消費しているのである。

(2) 食材・食品加工

つくばスタイルの食に関するまなざしは加工食品についてその職人や安全性などに対して向けられている。つくばスタイル No.13からみておこう。「つくばの食をつくる人々」と題する記事には8人の食材や食品加工に携わる人が紹介されているがその中に「わが子を育てるように手塩にかけたハム」として加工肉職人直江忠則氏が登場する。彼は1982年創業の「学園手作りハムの会」の代表で、本場ヨーロッパの伝統的な製法でハムなどをつくることにこだわっている。原料は地元の銘柄豚「ローズポーク」で、加工の2か月前から薬物投与が停止されたもの、作業の過程でも防腐剤や保存料などの添加物は一切使用しない。しっかりとスモークしたハムやソーセージは市販品とは比べ物にならないほどの豊かな風味のうまみを持つ²¹⁾、と賞されている。ほかに、「140年の歴史がつむぐ魂の醤油」の醤油醸造人や「140余年にわたる、美しい水が湧く筑波山麓で酒造りの歴史を紡いでいる蔵人」もまたつくばの食を創る人々として紹介されている。

21) 『つくばスタイル No.13』2011年9月、48～49ページ

ハム作りといえば「筑波ハム」もある。「長年の経験と最新の科学が筑波ハムの美味しさの秘密」の見出しの紹介文には、使用される豚は茨城県指定銘柄のローズポークとそれを改良した「つくば豚」の2種類で、つくば豚はつくば市の研究機関、養豚業者、筑波ハムの三者の連携によって生まれ、そのおいしさの理由は科学的な手法により優秀な遺伝子を持つ豚を選び出し交配させた血統の良さと工夫された飼料にあると述べられている²²⁾。

つくばはパンの街としてもアッピールされている。「つくばには本当に多くのパン屋が軒を連ね、それぞれ個性的なパンを作り上げています。市内、県内だけでなく東京からわざわざ買いに訪れる客がいたりとパンの街としての人気が定着しています²³⁾。」原材料にこだわったパンや自家製天然酵母を用いた個性あるパンは市民からの支持を得てにぎわっている。「MORGAN」は1983年創業でつくばでは老舗である。店頭には菓子パンが約40種類、食パンやフランスパンといったシンプルな大型パンが約20種類、防腐剤や安定剤などは一切使用せず、焼き立てを届けている。地元でだれもが知る名店で、焼きあがるパンを目当てに客足が絶えず、人気の食パンなどは予約が必要なほどである。

(3)里山の自然と歴史

里山、農村のポストモダン産業化、言い換えれば情動型産業への変化の可能性が、LOHAS型の消費スタイルに適合した農産物及びサービスを提供する産業への道であり、つくば周辺の里山地域における発展の方向性を示している。

『つくばスタイル』No.11には、「自然とともに生きる 心豊かな 里山ライフ」という特集があり、「都市と農村がほどよく調和した街・つくばは多種多様なライフスタイルをかなえる懐の深さもある」と述べ、古民家を再生する建築研究所の活動、貸し民家を設計・建設し提供する里山建築研究所、古き良き日本家屋を上手に生かしたおしゃれで気ままなのんびり猫ライフ、スローライフを楽しむ家族、抜群の住環境と美しい景観に魅了され筑波に住むことが夢であった夫婦の自宅兼設計事務所兼カフェ一体化で楽しむ生活、森を愛し、自然を慈しむつくばの風土に根ざしたものづくり一家の暮らし、といった具合である。

(4)つくば人

つくば市あるいはその周辺に住居を構え、生活し活躍する人びとがつくばスタイルの担い手であり、つくばを舞台にした生き方を提案しているが、どのような人々がその担い手であるか、やはり『つくばスタイル』No.14およびNo.18の記事からみておこう。

22) 『つくばスタイル No.12』2011年4月、29～30ページ

23) 同上書、50ページ

No.14は「つくば人（びと）～つくばに根付く人のチカラ」という特集で、30組を紹介している²⁴⁾。この特集ページの初めには次のようにつくばのイメージを表現している。

豊かな土地には豊かな人が根付く、つくばはそんな言葉がふさわしい街だ。

駅を降りると流れ出すゆったりとした空気。見上げると丸く広い空に筑波山がそびえる。

洗練された建築物が並び、見事に自然と調和している。

すぐそこにある自然と共存するこの町の人々は実にのびやかで、やわらかな心の持ち主。

そして行動派。そこかしこで面白いことを企む人がいて、そこにコミュニティができ、街は今日も活気に溢れている。

ここに紹介されている人々をみておく。パンや「ふくろうや」の若い女性店主、昭和52年にやってきて以来ずっと変貌してゆく筑波の街を見続けてきたフォトグラファー、市民楽団「アンサンブル・ベルデ」のメンバー夫妻、双子のアクションパフォーマー、農業生産法人「つくば農場」の経営者、身体を使って会話する魔法のコミュニケーションで人を楽しませるサーカスアーティスト、陶芸作家、「つくコン」を仕掛けるホテルマン、サイクリストたちのために「Pit Postつくば北条」を立ち上げた女性、漫画家、ラジオつくばパーソナリティー、画家兼養鶏農家、チアリーディングチーム「つくばオールスターチア」メンバー、草木染め「むらさきの会」主宰者、版画家、「つくばFC」のキーパーソン、かご作家、音楽と朗読のコラボをライフワークとするフリーアナウンサー、和楽器演奏ユニット「箏さらりん」メンバー、ママと社会をつなぐ授乳服「モーハウス」代表、新旧の建築を通してつくばを知るツアーを主催するNPO法人「つくば建築研究会」代表、カフェサロンでアートギャラリー「クラウドナイン」主宰者、移動式カフェ「もっくんカフェ」店主夫妻、洋服屋「JAM」、建物からビザ窯まで手作りのカフェ「音楽茶房Gクレフ」店主、有機農法絵苺トマトを生産し同業者ネットを広げる「しばはら愛善農園」、ノンケミカルで人・物・自然と共存をめざすナチュラル雑貨と雑穀&ベジレストラン「りつつん」店主、フリーペーパー「トッテ」編集者、といった個性あふれる人々が紹介されている。

つくばスタイルはさらにエコになる生活空間の工夫、再生可能エネルギーやエコに配慮した住宅などや、自然、農業、科学技術に囲まれた子育てなど多方面にわたってユニークな取り組みをしている人を紹介しつつ、ライフスタイル、消費スタ

24) 『つくばスタイル No.14』2012年4月、19～63ページ

イルとして提案している。こうした嗜好を持った人々が、周辺地域にもやってくるのであるからその嗜好に沿った対応が求められる。

4. 小野地区の方向性の可能性

つくば市内の周辺部、例えば北条地区などは古い街並みが注目され評価されているし、桜川市真壁は古い街並みとお祭り、イベントとして展開したひな祭りが人気を呼び一大観光地になった、というような成功例があり、小野や東城寺地区のような伝統と歴史、文化の蓄積のある地域にとっては、観光事業の先例となるかもしれない。漠然と首都圏の住人をターゲットとするより、より身近なつくば市周辺にいて新たなライフスタイルを模索している人々を呼び込むことに傾注するのが効果的かもしれない。

農業と観光産業の結合を模索するには、米・野菜・果樹の直売システムの形成とともに加工品の創出が効果的であろう。農業体験は維持的なものではなく、ライフスタイルとして生産に通年単位でかかわることが可能なシステムの構築が効果的であろう。

いずれにしても、つくばスタイルとはすなわち消費スタイルであり、消費者が生産者側の体験を含めて農産品や加工品を消費するのである。消費および消費者優先の社会がやってきているのであって、消費者ニーズがどこにあるか発見し、先取りして提案することが必要だ。しかしその生き方が、住民、生産者にとって「生きられる空間」であるかどうか再度問われなければならない。すなわち、現代の資本主義的経済システムと権力構造、そして消費スタイルによって空間は生産されているのであるが、その空間は消費スタイルの担い手ではなく空間の住人、ユーザーにとってどうなのか検討するのが現代の地域研究の課題なのである。

参考文献

- 『土浦市民俗調査報告書 第1集 山ノ荘の民俗・日枝神社の流鏑馬祭』土浦市立博物館、2014年
- 『新治村誕生50周年記念誌 新治村50年のあゆみ』茨城県新治村、平成18（2005）年
- 新治村史編纂委員会『図説新治村史』新治村教育委員会、1986（昭和61）年
- 中島恵「我が国の遊園地・テーマパーク産業の生成と発展」『大阪観光学大学観光学研究所報 観光&ツーリズム』第16号
- 『つくばスタイル』創刊号～第18号